活動拠点整備計画
（五十河民家苑）

民家苑PROJECT

京丹後民家苑

A. この提案書の目的

京丹後市五十河にある古民家を有効に利用し、活用するためにどのような事業手法が考えられるかを討議するにあたって、事業の骨格をなす思想、共通の思いを明確にし、事業に携わる人々の共通の目的を定めることが非常に重要です。こうした、根底にある基礎的な思想をコンセプトと言いますが、この提案書は、そうした基本的なコンセプトを提案する目的で作成しました。

B. この提案書の構成

以下の４項目に分けて、この提案書は記述されています。

1. コンセプトの有用性についてと、本提案書の想定活用法
2. 叩き台としてのコンセプト
3. コンセプト決定後
4. 具体的事例

1．コンセプトの有用性についてと、本提案書の想定活用法

コンセプトとはある種「契約」のようなものです。複数の人間が何か一つの目標に向かい、事業を遂行する上で欠かせない役割を果たす「ことば」です。最終的なゴールを表現した物ではなく、目標を達成する上で、欠かしてはならない共通の認識、約束事のようなものです。目標の本質を言葉で表現した物と言ってもよいかもしれません。 強い意志と信念を言葉で表した物とも言えるでしょう。

よく整理され一点の曇りもないコンセプトは、事業が様々な困難に遭遇した際に、本質的目標からぶれることなく、ゴールへ導いてくれる、強力なアドバイザーとなります。

その様なコンセプトがあれば、論理の道筋が定まり、明確なアプローチを実践することができます。よく整理され、明確なコンセプトに支えられた事業は、力強いメッセージを持ち必ず多くの人が説得力を感じ共感を呼ぶことでしょう。

具体的に事業として何を実行するのかを議論する前に、根底に流れるこの事業への思いを議論し、コンセプトを決定して下さい。コンセプトを纏める事は、意志を統一することでも在るため、往々にして中々決まらないと言うことがありますが、急ぐことなくじっくりと検討することが重要です。 本提案書では、一つの案としてのコンセプトを提示します。そこには様々な意見や見方があると思います。 議論の叩き台として、本提案書が一助になればと願います。

2．叩き台としてのコンセプト

この叩き台としてのコンセプトは、身近な問題意識からスタートしたものですが、五十河の民家苑を発展・活用することもイメージしながら作成したものです。

都心部では、食に対する意識が高まり安全・安心な食べ物に注目が集まっています。またスローライフと言われるような生活に憧れをもつ若い世代、リタイア後のゆとりある生活を望む世代も雑誌などで紹介されています。地方への注目が徐々に集まる中、現実は人口の流出、過疎化がとまらず文化の継承も危ぶまれる状況です。（ここで言う文化とは生活の知恵といった分野を指します。）

五十河の民家苑予定地は、価値ある伝統的古民家があり、電線も見えない様な、地方でも得難い豊かな風景の中にあります。この地の活用と、地域の発展を同時に満たせるアイデア、急激にではなく緩やかに、でも確実に継続されるような事業はないだろうか、そう思いながら作成しました。

『子供たちに残す田舎づくり』

このコンセプトは、次のような問題意識からスタートしました。

・私たちの国はすごく潜在的な不安が満ちている。

・ストレスも過剰になり過ぎている。

・自分の子どもたちにどんな未来が待っているのか、大きな不安を持っている。

・これから子どもをどういう風に育てればいいのかという不安も持っている。

つまり、私達人間の将来に対する、漠然とした不安感・・・そういった気分が広がりつつあるなぁという意識です。私達人間の将来は次の世代、そのまた次の世代である子供達へと続いく将来です。決して今生きる私達だけの将来ではありません。しかし、世の中の不安や将来に対する悲観的な考え方は、じつは子どもたちにはまったく関係のない事なのです。

ここで、私達おとな世代が将来に感じる不安感を、やわらげて行けるような行動が、何かの役に立つのではないかと考えてみます。こども達の世代のために出来ることはあるのだろうか。

・子供達の未来の為に何が出来るのだろうか？

・子供達が笑顔で過ごせる場所が出来ないだろうか？

・大人達の為にではなく子供達の為の場所。

子供達の為の場所、と言えば例えば「ひみつ基地」のような大人の知らない 場所（本当は知っているけれども）というのが考えられるかもしれません。ただしゲームセンターと言ったような現代の遊び場でなく、私達がかつで子供の頃に走り回った頃のような、原始的な遊び場所のイメージが、子供達の為の場所と言えるかもしれないと思うのです。

・子どもたちが夢中で遊べる場所。

・子どもたちが家に帰りたがらない場所。

・コンクリート、プラスチックのない木や土、水と火、生き物と触れる場所。

子供達の場所作りのために、私達大人の役割、大人にできることは何だろうか。大人自身も楽しむ事ができれば、より良い活動となるのではないかな。「自分たちも楽しむ」と言うことも重要だろう。大人が楽しめる事は何だろうか。

・地域の人達と一緒に田舎作りの最初の計画から土地、建物、の整備を行い
　作物栽培の為の畑整備、子供達の遊び場なども整備する。
・自分達で作物を栽培し料理、保存食など昔の知恵を地域の人達から学ぶ。
・大人が手と口を出さなければ子どもたちはすぐ元気になる！！

題して「子供たちに残す　田舎づくり」としてみました。このように問題意識からスタートして考え方を発展させることでコンセプトは形成されます。地域が抱える問題点、素朴なことから大きな問題まで、議論を尽くしてコンセプト作りを始めていただければと思います。もちろん、この叩き台としてのコンセプトを元にして議論を初めて貰ってもよいかと思います。。

3.コンセプト決定後

仮に「子供達に残す田舎作り」がコンセプトとなった場合、例えばですが次の様に具体的な手法の話しに進めていき、常にコンセプトとの整合性を振り返りながら内容を煮詰めていくような進め方になると思います。

・五十河の民家苑予定地をどの様に開墾していくか（ハタケを作るか、休憩場所をつくるか）
・来場の対象となる人たちはどの様な人たちか。（都会暮らしで田舎への憧れのある人々）
・都会の人々が泊まり込みで田舎作り（開墾作業）に来たときの宿泊は？（公民館や空き家の利用）
・都会の人は会員制にして集めるか、イベント形式で都度々々集めるか。（会費制、参加費制）
・固定した会員が出来るなら、農産物などを発送してはどうか（特産PR、地方PR、地域交流）
・お客さんが五十河が気に入って、定住したいと言ってきたらどうするか（空き家の斡旋、整備）
・作物の栽培方法を誰が指導するか。（地域の経験者にスタッフとしてお願いする）
・地方料理の調理法、伝統的な調理法の指導は誰がするか。（これも地域のお母さん方に・・・）
・そういった作業の道具の手配はどうするか。（倉庫に眠っている道具を集めるとか）
・地元の子供達と、お客さんの子供達との交流も楽しいかな、とか。

など、コンセプトから具体的なアイデア、それを実行するに当たっての問題点がどんどん出てきます。この時に常にコンセプトに立ち返り、この手段・手法は「子供達に残す田舎作り」になるか？を検証すれば、方向がぶれず、また意見の対立に対してもコンセプトで判断していくことが可能です。

4.具体的な参考事例

五十河の事例とは異なりますが、田舎作りと似たような「田舎体験」のような事例を紹介します。

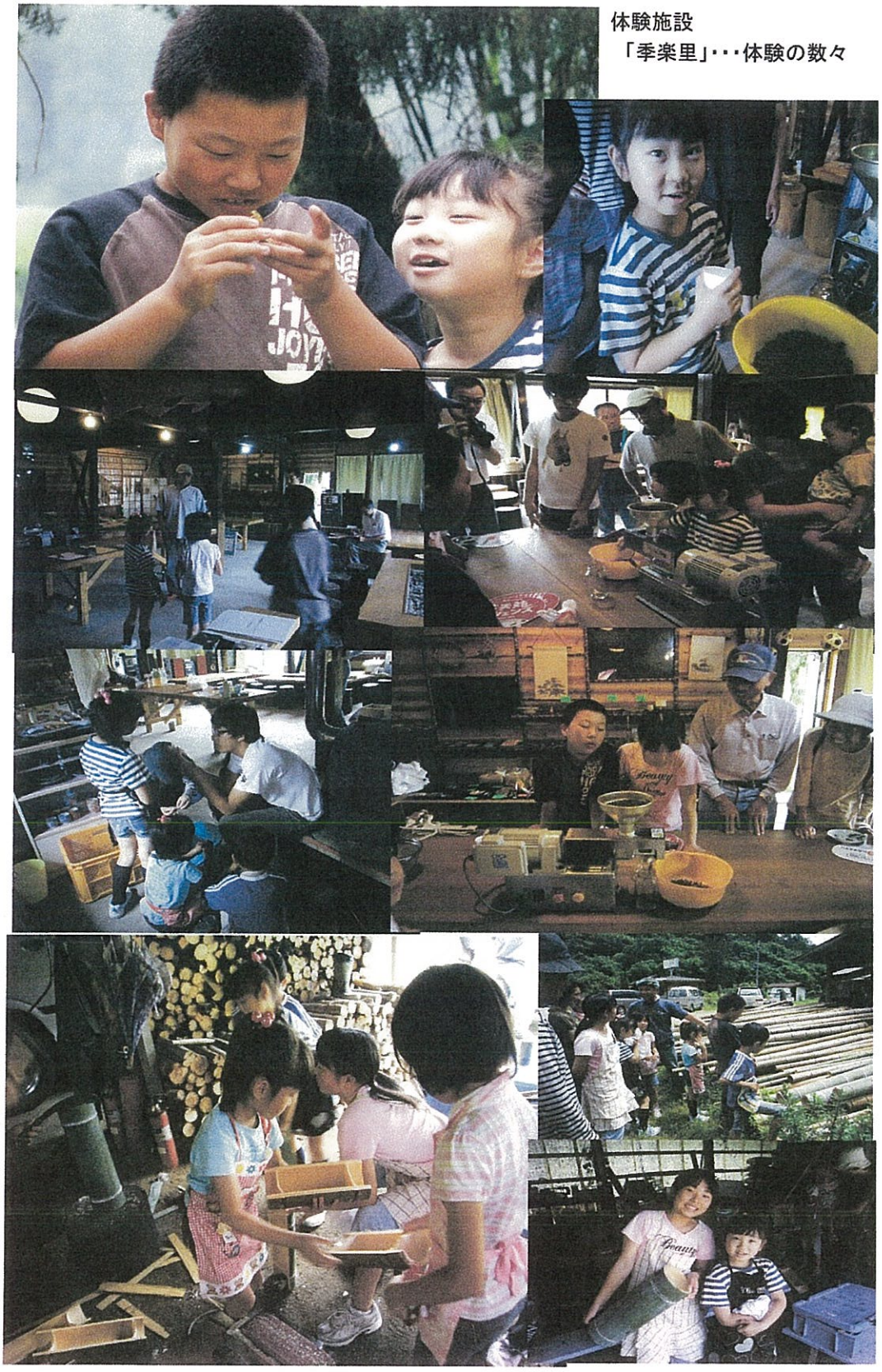
神戸市にある、市民農園では「里山クラブ」「ワンダーランド」といった事業を行っています。「里山クラブ」は、農園に近接する里山を、会員と地元のオーナーが一緒になって整備するというプログラムです。

この里山は手入れが行き届いていなかったため、竹が増殖し荒れていましたが、竹の切り出しを行い、若干の開墾をし様々な活動をしています。ツリーハウスを手作業で建築したり、キノコ類のホダギ置場を作りキノコ類の栽培を行ったり、落ち葉を集めて腐葉土を作りを行っています。作業の後にはたき火を囲んで鍋料理の昼食会をし、会員同士の交流になっています。料理の準備も会員が自主的に行い、オーナーは場所と食材・道具の提供をします。里山の整備を通して、道具の使い方・竹や樹木の特徴、里山の存在意義、鍋を囲んでの情報交換など様々な伝承が行われます。このプログラムでは冬の農閑期に農園会員に来場して貰う事と、近接する里山の整備を手伝って貰う、という２つの目的を達成しています。

ワンダーランドは「里山クラブ」から発展して始まったプログラムです。里山クラブで作っていた腐葉土の中にカブトムシの幼虫が数百匹発生し、子供達の為にカブトムシの幼虫専用の場所をつくりました。また、里山の開墾からビオトープを作り、動植物の観察ができるようになってきました。こうした副産物的な要素を活用し、子供達の山遊びの場所として整備していこうと始まったのが「ワンダーランド」です。このプログラムでは子供達と若い親世代を呼び込む事と、農園に親しみ会員になってもらうという２つの目的を達成しています。

この２つの事例は、五十河民家苑の利活用にも応用できるアイデアを含んでいるかもしれません。

体験施設
「季楽里」･･･体験の数々



炭竹工房で体験の数々